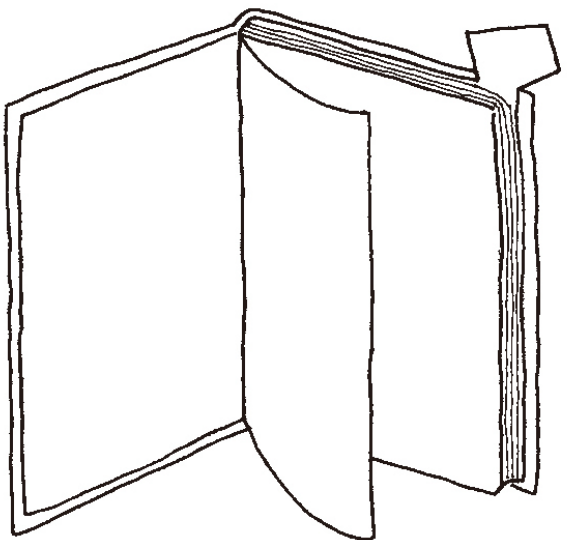




製本業界に古くからあるラッキーチャームを さらにハッピーな招福万来ノートにリ・ボーン

人生はよく一冊の本にたとえられます。あなたという著者が描く、あなただけの物語。長い人生です。もしかすると、めくるのに勇気がいるページも出てくるかもしれません。でもそんなページほど、あついでふりかえってみると「あそこが分岐点だった」と思える運命のラッキーページになったりする。まるでコインの裏表のように禍福が入れ替わるのもまた人生あるあるです。

福本



「えびす紙小話」
居残っていたのはだあれ？

日本の旧暦によると、10月の別名は神無月。日本各地にいる八百万の神様が出雲大社に集合する「神集い」があるため、そう呼ばれ、出雲地方では逆にこの期間を「神有月」と呼んでいます。一説には、この神集いが終わったあとも恵比寿様だけが出雲に居残ったことから居残り神=裁ち残り紙=えびす紙=福紙になったとも言われています。恵比寿様は庶民に長く愛されてきた七福神の一人。豊漁や商売繁盛の神様としてあつい信仰を集めています。

製本業界にもこれに通じるものがあり、わたしたちはそれを「福紙」と読んでいます。製本作業でこくたまに発生するページの角が内側に折れ込んだ裁ち残しを、みなさんもお覧になったことがあるでしょうか。その三角形の形状が恵比寿様の頭巾を連想させることから「えびす紙」とも「福紙」とも言われています。本来は検本チェックで事前に取りのぞかれるものですが、こうして自分の元に来たことを「縁」だと思い、福に転じて慈しむ。先人たちの粋な洒落っ気を感じさせるネーミングです。この製本業界独自のラッキーチャーム「福紙」に石田製本からさらに招福万来の願いと製本職人の技をこめて。

招福万来ノート「福本」誕生。